2026 年 11 月 1 日　BMCN 年次大会　午後の部　発表要旨

中学校社会科の学習を支える語彙とは
−小学校教科書語彙との接続−

山本裕子（愛知淑徳大学）
川村よし子（チュウ太プロジェクト）
斎藤里美（国際基督教大学）
鷲見幸美（名古屋大学）

学習支援は小学校で完結するものではなく、中学校以降へと続く。外国につながる児童生徒の場合、中学校から学習を始める場合も少なくない。中学校の教科学習における語彙負荷は小学校と比べて格段に大きく、例えば社会科においては小学校社会科教科書（3〜6 年）の語彙が 12,241 語であるのに対し、中学校社会科教科書では 22,884 語にのぼる。このような大量の語彙に直面する中で、何を優先して習得すべきかを示すことは、支援上の重要な課題となる。そのため、本研究では社会科に着目して、中学校の学習に有用な語彙はどのようなものか検討することにした。

筆者らは愛知県尾張地方の小学校教科書（小学校 3〜6 年、全教科）から語彙を抽出し、小学校教科書語彙リストを公開している(山本・鷲見・川村 2025)。このリストは複合語を含む約 2 万語から成り、膨大な語彙量であるため、教科・学年の頻度情報をもとに小学校での学習上、より重要度が高いと考えられる語として 2,076 語を「教科書基礎語（以下、基礎語）」として絞り込んだ。「基礎語」は、5 教科全科目で用いられる「学習基礎語 1」（566 語）、4 教科以上で用いられる「学習基礎語 2」（836 語）、各教科の基礎語（4 教科計 544 語）、「生活基礎語」（129 語）で構成されている。基礎語が中学校の教科学習においてどのような位置づけの語であるかを明らかにすることは、学習上の優先順位を定める根拠となり得る。そこで、愛知県尾張地方で用いられている中学校社会科 3 科目（公民・地理・歴史）の教科書各 1 冊を対象に語彙 22,884 語を抽出し、基礎語の中学校における位置づけを検討するため、以下の 2 つの分析を行なった。

まず、分析 1 として、中学校社会科の 3 科目の語彙を、出現科目の組み合わせに応じて「3 科目共通語」「2 科目共通語」「科目固有語」に分類し、各分類に基礎語がどの程度含まれるかを分析した。次に分析 2 として、中学校の各分類語が、小学校の語彙にどの程度出現するかを、社会科教科書のみ（A 群）、社会科＋他教科（B 群）、他教科のみ（C 群）、小学校教科書には存在しない（D 群）の 4 群に分類して照合した。さらにそれぞれに基礎語がどの程度含まれるかを分析した。分析の結果を以下に述べる。

分析 1 の結果： 3 科目共通語 2,593 語では 38.2%（990 語）が基礎語に該当する。共通性が高い分類ほど基礎語率が高い。990 語のうち学習基礎語 1（430 語）と学習基礎語 2（393 語）の合計 823 語が 83.1%を占め、教科横断的な汎用性の高い語が中核を成すことが示された。また、3 科目共通語には社会科基礎語も 110 語含まれる。一方、科目固有語は、公民固有語 3,956 語、地理固有語 4,895 語、歴史固有語 7,758 語と非常に語数が多いが、いずれにおいても基礎語率は 3~4%台と低い。

分析 2 の結果： 3 科目共通語の 87.6%が小学校社会科教科書にも出現することが確認された。さらに 3 科目共通語のうち 66.9%にあたる 1,735 語は、小学校の社会科と他教科という複数教科に出現する B 群に属し、そのうち 970 語（55.9%）が基礎語に該当した。

以上の結果は、小学校教科書から絞り込んだ基礎語が、中学校の学習でも社会科 3 科目を横断する学習語彙の核として機能していることを示していると言えよう。外国につながる子どもへの支援において、特に学習基礎語 1，2 を中心とする基礎語群を優先的に習得させることは、中学校社会科 3 科目すべての学習基盤の形成に効率的に貢献すると考えられる。今後は分析の対象を理科へ広げ、「教科書基礎語」の有用性をさらに検証したい。

参考文献

山本裕子・鷲見幸美・川村よし子（2025）「小学校教科書語彙リストに基づいた『教科書基礎語』の特徴とリスト活用のための付加情報」『子どもの日本語教育研究』第 8 号, pp.16-35.

種別：研究発表